会員投稿

世のため人のために

久松聰（高槻市）

「瞑想によって前頭前野を働かせ、β―エンドルフィンを分泌させ、睡眠脳波のα波を出させると、直接眼に見える現実の時間と空間の世界を超越したバーチャルな状態の瞑想脳（宇宙脳）になる。意識は無限の宇宙とつながり、可能性も拡がる」と、春山茂雄氏（71歳）はその著書『新脳内革命・体内年齢28歳のレシピ』のなかで述べている。

そして氏は言う。「世のため、人のために活動すればするほど、脳内に快感物質のβ―エンドルフィンがこんこんと湧き出る。このホルモンは自然治癒力・老化防止に働き、マザー・テレサやシュバイツアー博士、ナイチンゲールのように自分の情熱にそって社会福祉的な活動をしている人は高齢にもかかわらず、かくしゃくとしている人物が少なくない」と。

さらに、人間の脳と行動の関係について次のように述べている。

「ヒトの脳は四つの部分に分かれ、①筋肉脳（爬虫類脳）②五感脳（犬猫脳）③社会脳（人間脳）④瞑想脳（宇宙脳）と段階的にその働きは高度になる。④の段階で、世のため人のために役立ちたい・人を救いたい・画家や音楽家のように抽象的な表現をしたいなどの欲求を持って活動するとき、脳内快感物質、β―エンドルフィンが出る。衣食足りて礼節を知る③よりさらに高度な④の瞑想脳の段階では、論語の40歳＝不惑、50歳＝知命、60歳＝耳順、70歳＝従心のことわざ、すなわち瞑想によって天命を知り、天の指し示す声をはっきり聞き、それに従って行動しても人の道から外れることはない」と。

「デンティストリィ・イズ・ワーク・オブ・ラヴ・ウチムラカンゾウ」の英文の揮毫が私の診療室にも掲示してある。これはかつて明治、大正の古きよき時代に、内村鑑三氏が歯の治療を受けた時の歯科医師への御礼の書である。患者さんにそれはどんな意味かと聞かれ、私たち歯科医師は患者さんのために心を込めて歯の治療に励み、義歯を作っていると私が説明すると、患者さんの緊張した表情がゆるみ、患者さんと何かしら気持ちが相通じるように感じられるのである。

今の私たちの置かれた環境は内村鑑三氏の時代とは隔世の感である。医療保険制度しかり、経営環境しかり、などなど良くなっていることもあれば厳しいことも多い。バーチャルな宇宙脳を働かせる世のため人のための日頃の活動は、私たちの診療生活を切り拓く智慧と勇気をもたらし、患者さんの厚い信頼を得ることになるであろう。

水田の働き者たち

林俊宏（中央区）

夏の夜、涼みがてら家の近所の水田の周りを散歩していると、青々とした稲のほのかに新米の香りのする風を感じて心が癒やされる。

しかし、ついこの間まで田んぼであったのが、いつの間にか建売住宅になっていたりする。先日、わずかに残された、田植えが終わったばかりの水田で合鴨が2羽ウロウロしているのを見かけた。ひょっとして鴨を利用した自然農法かと思ったが、どうやら近所の池から迷い込んで来たらしい。

自然農法と言えば、除草剤などの化学薬品を使わず種々の生物を利用する農法であるが、私が子どもの頃、今から思えばそのような生物を水田で見かけたことがある。それはカブトエビという甲殻類で形は海にいるカブトガニに似ているが、大きさは、はるかに小さく2～3㌢ぐらいである。

エビという名前がついているがエビではなく、ミジンコの仲間である。5～6月頃、田植えを終わった頃の水田に発生し、カブトのような甲羅の腹側には細かい足が何本もあり、それを波打たせて水中をせわしくウロウロ泳ぎまわる姿は、実にユーモラスである。

そのカブトエビがなぜ自然農法に役立っているかというと、彼らが水中の雑草の芽を食べてくれ、さらに足を盛んに動かして水底の泥を掘り返すので水が濁り、雑草の発芽と成長に必要な光を遮断するからだそうだ。故に、別名「田の草取り虫」とも呼ばれている。他にもホウネンエビというエビではないが金魚のような優雅なのもいるし、実に多くの小生物がいわばビオトープとしての水田の生態系をつくっている。ただ、これらの生物は田に水の無くなる盛夏の頃には消えてしまうはかない運命にある。

しかし、卵は土中で越年し、翌年再び上から湧くように生まれてくるというたくましさがある。

今の日本の農業の実情を考えると田を残すのは大変困難なことだと思うが、都会のオアシス、元祖ビオトープとも言える水田をこれらの愛すべき田の働き者たちと共に残してもらいたいものである。

尖閣列島

門奈丈石（平野区）

日本固有の領土

尖閣列島について政府や多くのメディアの見解は、1895年1月の閣議において「無主地先占の法理」により、わが国の領土として沖縄県に編入し、標柱を建てることに決めた。だから「日本固有の領土」だと主張している。しかし、わずか117年を「固有」と言えるのか。

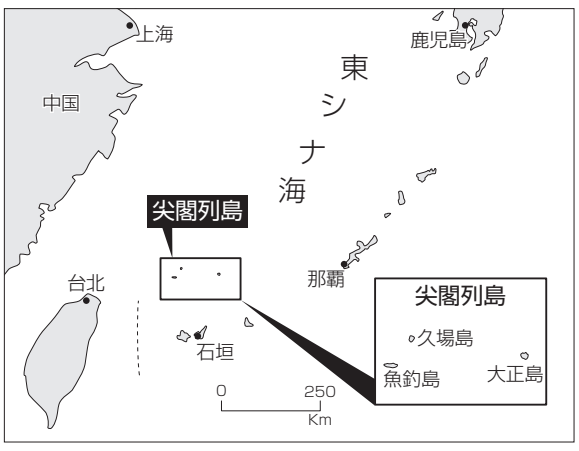
尖閣には、はるか以前から関わりをもつ明・清・琉球王国があり、それらの国の文献（1561年の明福建沿海山図など）には釣魚島、黄尾島、赤尾島の名が記載され、1895年は日清戦争が日本の勝利で終わった年に当たることなど、気になる箇所が浮かんできた。

地理的には、尖閣列島は石垣島及び台湾からそれぞれ約170㌔あり、沖縄本島から約400㌔、中国本土から約370㌔で、ほぼ沖縄と中国の中間に当たる。面積は、列島で一番大きい尖閣島は3・7平方㌔で、1平方㌔以下の四つの島と岩礁から成り立ち、その場所は中国大陸の大陸棚の南端に位置する。沖縄列島との間には黒潮の分流が流れる沖縄トラフがあり、小型漁船では自由に往来できる海域でなかった。動力船の時代になってカツオ・トビウオなどの好漁場となり、沖縄からも出漁し、一時期、かつお節工場が操業していたが、1940年に閉鎖し、以後、無人島になっている。

中国と琉球王国

沖縄列島には1879年まで琉球王国があった。1756年の琉球総図によると、北は喜界島、南は与那国島までの36の島々により構成されている。1608年島津軍の侵攻を受け、以後、薩摩藩と中国（清）の両国に朝貢し、1879年日本政府による琉球処分を受けるまで19代にわたり独立国として存続した。

中国と琉球王国は、明の頃より冊封関係にあり、その使節は釣魚列島の島々を航海の目印にしていた。帰国後、提出する「冊封使録」には釣魚島、黄尾島、赤尾島の名が載っている。日本では1785年林子平の「三国通覧図説」に釣魚台、黄尾山、赤尾山の名で描かれているが、その島々は中国領に彩色されている。また、薩摩藩で描かれた「三国絵図」には、尖閣島は描かれていない。



尖閣列島は、沖縄から約400㌔、中国から約370㌔で中間に位置する

植民地主義の法理

近世になり、西欧列強による植民地争奪合戦に対し、行動の規律と新しい領土取得法としてオランダの法学者が唱えだした「先占の法理」がまかり通るようになった。大航海時代初期の覇者スペイン・ポルトガルがアメリカ大陸で次々に植民地を広げたころは「発見優先」であった。しかし、遅れて登場したイギリス・オランダなどの国々が勢力を伸ばすと共に「無主地先占の法理」が登場したが、それだけでは満足せず、住人がいても、どこの国にも属していなければ「無主地」とされた。人が住んでいても、国家を構成してなかったアフリカ・アメリカ・アジアは、欧州列強による植民地化が広がり、イギリスは「太陽の沈まぬ国」と言われるほど、植民地を持った。植民地主義・覇権主義を正当化するために考えられた「法理」が現代に受け継がれてきた。

尖閣列島を発見したのは中国人で、その島に釣魚などの名をつけ、公式記録である「冊封使録」に記載された。つまり、17～18世紀頃は中国領と考えられていたものに西欧列強諸国の侵略で弱体化した状況を捉え、植民地主義国の法理を適用し「無主地」にしたのではないかと考えられる。

先人処理乗り越える賢明さを

隣接する国家が国境地帯で領有権を主張し合うのは、絶えず世界各地で起こっている。双方に言い分があり、一方が全面的に正しく、他方に全く根拠がないということはない。領土問題は双方の国民感情を刺激して対立を生み、国論をある目的に誘導する手段として利用されやすい。

何事も平和的に解決しようとする気運がある現在、相互の信頼を醸成し、共同利用の道など、新しい取り組みを模索すべきだ。小さい島の領有を争うことに両国の発展やアジアの平和に益する処があるだろうか。日中関係正常化に際し周恩来は、「小異を残して大同につく」と言い、鄧小平は「尖閣問題を棚上げにして友好優先」の国交を選んだ。21世紀に生きる者として先人の処理を乗り越える賢明さがほしい。

注：先占については、①占有の対象が無主の地であること、②国家による領有の意思表示、③国家による実効的な支配――が国際法上の条件としてあげられる。